

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	敬虔なる二人の国王：アルフレッド王と聖エドモンド
Sub Title	Two Christian kings : King Alfred and Saint Edmund
Author	小田, 卓爾(Oda, Takuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.241(132)- 256(117)
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0256

敬虔なる二人の国王

—アルフレッド王と聖エドマンド—

小田 卓爾

はじめに

紀元869年、東アングリア国王エドマンドを殺害したあと、デイン人の王イーヴァルがどのような行動をとったか、明らかでない。翌年、イーヴァルの弟と思われるハールヴダンがウェセックス王国に侵入したときには、その軍団の中にイーヴァルの姿は見られない。イギリス側の資料は、その後のイーヴァルについては、ほとんど触れていないのである。『アングロ・サクソン年代記』においても、紀元878年の記事をのぞけば、彼についての言及はまったく見られない。『アングロ・サクソン年代記』はウェセックス王国の編纂であり、自国に関わりのないことには、年代記の編纂者もさほど関心を示さなかったのかもしれない。また、エドマンド王の殉教後、およそ一世紀近く経たころに編纂された『エゼルウェアルドの年代記』は、もっと簡潔に「イーヴァルは、その年（紀元869年）に死んだ」と、早々と亡き者にしている。エゼルウェアルドは、自らアルフレッド王の兄エゼルレッド王の末裔と自称しているが、『エゼルウェアルドの年代記』も、ウェセックス王国を主体に編纂されたものである。イーヴァルは、すでに王国には無縁であった。

しかし、北欧の記録を見ると、イーヴァルはエドマンド王を殺害したあと、再び北上し、ノーサムブリアを縦断してスコットランドのアントニウスの壁の北方ダンバートンに向かったとされている。それから、海路をとってダブリンにまで足を伸ばした。この経緯については、A. P. スミスの精緻な研究がある。ウェセックス王国の年代記編纂者の思惑とは別に、イ

イーヴァルは生きていたのである。

イーヴァルが北方へ帰路をとったあと、東アングリア王国を制圧したデイン人の軍団は、イーヴァルの弟とされるハールヴダンに率いられ、紀元870年、ウェセックス王国へ向かう。当時、ウェセックス王国はアルフレッドの兄王エゼルレッドが統治していたが、翌871年には、有名なアッシュダウンの戦いがパークシャー丘陵の一角で繰り広げられた。戦闘はウェセックス軍の勝利に終わったが、これ以降、デイン人の勢いは衰えを知らず、統率者をグスルムにかえて、ウェセックス王国を駆けめぐった。グスルムは紀元871年の「夏の大軍団」を率いて到来した巧緻にたけた統領で、アルフレッド王の宿敵となった。

結局、イーヴァルの最期については定かではない。スミスも、その問題には十分に触れていない。多くのデイン人側の資料から見て、彼がダブリンにまで帰還していることはほぼ間違いないところであり、となると『エゼルウェアルドの年代記』による紀元869年死亡説はウェセックス王国の編纂者の偏見として一蹴されよう。

ところが、13世紀の歴史家ウエンドウヴァーのロジャーは、その著書『歴史の花々』紀元878年の記事で、イーヴァルの最期について次のような興味深い記述を残している。

このギュトロ（グスルム）の略奪の嵐は、厭わしくも悪質なヒングワール（イーヴァル）とハールデン（ハールヴダン）が加わることによって、その極限にまで達していた。彼らは南ウェイルズから23隻の船でやってきた。そして、そこで越冬し、獐猛な狼のように殺戮を繰り返し修道院を焼き討ちしたのである。やがて、彼らはデヴォンに到来したが、その地で、かのヒングワールはフッパとハールデンそして1200人の兵士とともにキンウィス城の前でアルフレッド王の軍勢によって殺害されてしまった。かくして、先に述べた悪の手先によって流された、祝福されし国王にして殉教者エドマンドの血は、復讐されたのである。

この記事が伝えるところでは、アルフレッド王とグスルムとの間に繰り広げられた激戦に、イーヴァルも側面から関与していたことになり、この戦いで戦死したとなれば、没年は紀元878年ということになる。

しかし、『アングロ・サクソン年代記』やアッサーの『アルフレッド大王伝』における同年の記事には、ハールヴダンが紀元875年に軍団の一部を率いてノーサンプリア方面に北上した、と書かれている。そして、当地で「彼らは土地を耕し定住した」という。さらには、『アングロ・サクソン年代記』紀元878年の記事には、次のような興味深い叙述が見られる。

イーヴァルとハールヴダン兄弟の弟が23隻の船でウェセックスのデヴォンに侵入し、彼は殺害された。また、彼とともに800人の部下が、さらに、40人の家臣も。

同じ事件を『アルフレッド大王伝』はさらに詳しく、こう述べている。

イーヴァルとハールヴダン兄弟の弟が、越冬していたグヴェッドで多数のキリスト教徒を虐殺したあと、その地から23隻の船で出帆し、デヴォンに到来した。そして、当地で悪業を働いているうちに、キュンウィットの城塞の前で、国王の家臣たちの手にかかって1200人の兵士とともに殺害されるという悲惨な結末を迎えた。

この三つの資料を並べてみると、『アングロ・サクソン年代記』と『アルフレッド大王伝』では、襲来したのはイーヴァルとハールヴダン兄弟の弟となっている。ところが、『歴史の花々』では、イーヴァルとフツバとハールヴダンがやってきて三人とも殺害されたことになっている。正しくは、イーヴァルは紀元873年に、ハールヴダンは紀元877年に、それぞれ没していると思われるので、この記述は間違いである。おそらく、デヴォンに襲来したのは、二人の兄弟の弟のフツバであろう。また、殺害されたデ

イン人の数は『アルフレッド大王伝』と『歴史の花々』は一致しているが、最も古い資料である『アングロ・サクソン年代記』はもっと少ない。さらに、『アルフレッド大王伝』と『歴史の花々』は、デイン人らが殺害された場所を明記している。

(1)

やや前置きが長くなったが、ここで着目すべきは、ウェンドウヴァーのロジャーだけが『歴史の花々』の中で述べている部分である。つまり、デイン人がアルフレッド王の軍勢によって殺害されたあと、「先に述べた悪の手先によって流された、祝福されし国王にして殉教者エドマンドの血は、復讐された」というのである。ここに、アルフレッド王とエドマンド王の接点が具体的に示されているからである。マーシャ王国とウェセックス王国とは、アルフレッド王の姉エゼルスウィスがマーシャ国王ブルグレッドと結婚していることから、親密な関係にあった。しかし、こうした婚姻関係がなかったウェセックス王国と東アングリア王国とのつながりは、いまひとつ明かでなかった。例えば、悲惨な結果に終わった東アングリア王国の情勢とエドマンド王の動向に関する情報が、ウェセックス王国とアルフレッド王の耳にどれほど届いていたか。碩学 D. ホワイトロックは「年代記編纂者もアッサーも東アングリアについては興味がなく、情報も不十分で、委細はわからなかったことだろう」と述べている。

ところが、『アングロ・サクソン年代記』は、意外なほど頻繁にデイン人との関わりで東アングリア王国について言及している。アッサーの『アルフレッド大王伝』も、デイン人の動向とともに東アングリア王国に計8箇所まで触れているのである。まず、紀元866年（今日の暦では865年）、「大軍団」が東アングリア王国に侵入したこと。次に、紀元867（866）年に、この大軍団がノーサムブリアのヨークに向かったこと。さらに、紀元870（869）年、ノーサムブリアから東アングリア王国にもどってきて、セットフォードで越冬したこと。そして、紀元870年にイーヴァルとエドマンド王は対決する。アッサーは、その経緯を次のように述べている。

この年、東アングル人の国王エドマンドが、この異教徒軍と激しく戦った。しかし、誠に悲しいかな！ 彼自身も多くの臣下とともにそこで殺害され、異教徒らが圧倒的な勝利をおさめた。そして、敵軍が戦場をものにし、その領域全土を彼らの支配下に置いたのである。

ここまで大軍団を指揮したのがイーヴァルである。先に述べたように、イーヴァルはこの軍団を去ってノーサンプリアへもどっている。かくして、紀元871（870）年、統領をハールヴダンに代えて、デイン人の軍団は西方のウェセックス王国をめざすのである。そして、戦闘は9回とも8回とも言われているが、それ以外にも小競合が続き、中でも、アッシュグワンの戦いは、エゼルレッド王のもとでアルフレッドも副将として参戦した激闘であった。この戦いにおいて祈禱に専念する兄王を待ち切れずに自国の軍勢を動かした彼の判断と行為に対する評価は難しい。彼の英断が讃えられる一方で、12世紀の歴史家マームスベリーのウィリアムのように、神をも兄をも無視した「軽率な行為」と批判するものもいた。紀元871年は、ウィルトンの戦いの前に兄王エゼルレッドは帰天し、アルフレッドが即位した年であった。これからしばらく、東アングリアは『アルフレッド大王伝』の視界から消える。

ふたたび、東アングリアが話題になるのは、アルフレッド王が仇敵グスルムをエディントンで破り、ウェセックス王国に一応の平和をもたらしたところである。グスルムの率いる軍団はチップナムからサイレンセスターへ移動し、そこから、紀元880年に東アングリアへと向かった。彼らは、その地に定住したが、グスルムはキリスト教徒となった。彼がアルフレッド王の与えた洗礼名「アゼルスタン」を刻した貨幣を流通させているところを見ると、紀元890年に没するまで、東アングリアのデイン人の王となり、さほどの波乱もなく統治を行っていたものと思われる。ウェセックス王国との関係も概して安定していたと言えるであろう。しかし、グスルムの指令かどうか定かではないが、アルフレッド王は局所的に東アングリアの異

教徒に手を焼いている。紀元884年の記事は興味深い。

その年、アングロ・サクソン人の王アルフレッドは兵士を満載した彼の艦隊を、収奪を目的にケントから東アングリアへ派遣した。彼らがストゥア河口に到着するや、装備を整えた13隻の異教徒の艦隊が彼らと遭遇し、海戦が開始され、あちこちで熾烈な戦闘が繰り広げられた。異教徒らは全て殺害され、彼らの船舶も全て金品もろとも没収された。このあと、勝利を得た王の艦隊が帰途につくとき、東アングリア人の土地に居住する異教徒らが、各地から戦艦を結集し、同じ川の河口で王の艦隊と対峙した。そして、海戦を交えた末に、異教徒側が勝利をおさめた。

さらに、同じ年の記事に「東アングリアに滞留していた異教徒軍は、不埒にもアルフレッド王と結んだ和平の条約を破った」と書かれている。

『アルフレッド大王伝』における、これらの東アングリアに関する計8箇所の記事を読むと、意外にもウェセックス王国と東アングリア王国との間には、かなり深い関係があったことが推察される。アルフレッド王にとって、母国を襲ったデイン人の軍団が東アングリアから襲来し、また、打ち破った軍団が再び東アングリアにもどって定住したとなれば、東アングリアに興味を抱かないはずはないであろうし、彼らが定住したあとも気がかりであったとしても不思議ではない。そして、このデイン人の軍団がウェセックス王国を襲う直前に東アングリア国王を無残にも殺害したとなれば、その悲惨なエドモンド王に思いを致すのも当然と言えるであろう。アルフレッド王は、これまでデイン人の条約不履行によって苦い思いをしたことが再三あった。紀元876年のウェアラムでの彼らの背信行為は、アッサーも委細に記録にとどめている。自ら艦隊を率いて東アングリアに出向いたことも不思議ではない。このように見ると、アルフレッド王が、東アングリア王国とエドモンド王の情報をもっていなかったと考えることは難しい。

(2)

エドモンド王の殉教については、王の他界したあと一世紀を過ぎたころ、フランスのフルーリからラムズビーの修道院にきたフルーリのアポーによって『聖エドモンドの受難』の中で詳細に描かれている。紀元985年から987年の間、少なくともエドモンド王の没後116年を経たころに書かれたものであり、その成立過程から見てもエドモンド王の受難の話は信憑性がきわめて高い。アポーはダンスタン大司教から話を聞き、ダンスタン大司教は若いころ一人の古老がアゼルスタン王に話をするのを聞いたが、この古老は若いころにエドモンド王の鎧持ちをしていたのである。この3人の記憶は116年ほどの年月を確実に埋めることができると考えられるからである。

ここで、エドモンド王は、デイン人に対して戦いを放棄したとき、逃亡を勧める司教に対して自らの置かれた立場を3つ挙げている。第1は、聖水盤にふさわしい法衣をまとい受洗したこと。第2は、より大きな管区の司教の認証のつく堅信の秘蹟を受けたこと。第3は、貴殿（司教）と国民すべてに歓呼の声に迎えられて国王としての主権を得たこと、である。最初の2つから、エドモンド王が敬虔なキリスト者を自認していることがわかり、第3から、さらに真摯な統治者であることも自覚していた。つまり、エドモンド王は紛れもなく「キリスト教徒の国王」であった。この敬虔なキリスト教徒の国王が、イーヴァル率いる異教徒の外敵と対峙したのである。

イーヴァルの東アングリア上陸の意図するところは、「古来の財宝と先祖伝来の財産を分かち合い、将来、貴殿（エドモンド王）が我が主君（イーヴァル）のもとで統治する」ことであった。つまり、ノーサンプリア王国のエグベルトやマーシャ王国のケオルウルフのように、エドモンド王を彼らの傀儡の王にすることであった。そして、過去の勝利の実績と絶大な軍事力を誇示するのである。

一方、イーヴァルの軍団に相対したエドモンド王は、『アングロ・サク

ソン年代記』と『アルフレッド大王伝』においては、デイン人との戦闘の中で殺害されたことになっている。『歴史の花々』では、イーヴァルに届いた情報として「最も信仰の篤いエドモンド王は、勇敢にして豪胆な武人であり、類まれな頑強な肉体そして背丈が高かった」と述べられている。『アングロ・サクソン年代記』と『アルフレッド大王伝』はともにウェセックス王国のものであり、『歴史の花々』が13世紀の伝記であることを考慮すると、これらは必ずしも事実を描写したとは言えないかもしれないが、『聖エドモンドの受難』の中でも、イーヴァルはエドモンド王が「人生の盛時を迎えて活力も旺盛な明敏な武将」という使者の報告を受けている。また、エドモンド王自身「国王の主権」を得た立場を強調しており、国民を護るために武將らしく勇敢に立ち向かったことが想像される。だが、そのときエドモンド王は、圧倒的な戦力の差をただちに察知したのかもしれない。逃亡を勧める司教に対して、「戦場から逃亡する不名誉はとも耐えられなかった。そこで、私の方から進んで身を投げ出そう」と自らの堅い決意を伝えている。

ここで、エドモンド王の意向は武力的なものから精神的なものへと移るのである。「王国は保証する」というイーヴァルの伝言を使者から聞いて、使者に次のようにイーヴァルに伝えるようにと言って帰す。

「……威嚇して私をこわがらせようとしても無理だ。破滅に誘うわなや詭弁で私をだますこともできない。なぜなら、そなたは私が全身キリスト教の信仰の鎧をまとっていることに気づくだらうから。これまで神の御恵みによって私に授けられた財宝や金銭については、そなたが異常な貪欲にかられるままに、獲得して浪費せよ。なぜなら、そなたが私のこの脆弱な肉体をばらばらにしようとも、真に自由な私の魂は、ほんの一瞬たりとも、そなたに屈伏することはないであろうから。」

かくして、エドモンド王は捕獲され、樹木に縛りつけられ、まるで聖セ

バスティアンのように、全身に弓矢を打ち込まれて殉教する。ここに、東アングリア王国も崩壊した。しかし、エドモンド王の伝説は彩りを添えて語り継がれてゆく。

エドモンド王は、武力による闘争を放棄したが、信仰による闘争によって敗北を免れたと言える。しかし、「国王の主権を得た」ことを自らの立場のひとつに数えたエドモンド王である。「キリスト教徒の国王」として、武力によってイーヴァルを倒し、国民と王国を救いたかたはずである。当時、信仰と武力とは、かならずしも相いれないものではなかった。アルフレッドの父王エゼルウルフと兄王エゼルバルドに仕えたシャーボンの司教エアルフスタンは、きわめて好戦的で、二人を支えつつたびたびデイン人との戦闘に赴いている。また、エアルフスタンを後継したヘアハムンドは、兄王エゼルレッドとアルフレッドとともに、デイン人との戦いに臨み、メルトゥンの戦いで戦死している。エドモンド王が武力の勝負を望んだとしても不思議ではなかった。しかし、エドモンド王は武器を捨てる。A. P. スミスは、エドモンド王には、アルフレッド王とちがって「資力と幸運がなかった」と述べている。

しかし、かりに資力に恵まれていたとしても、イーヴァルに勝利できたかどうかわからない。イーヴァルは、ただ残虐に暴力をふるっただけでなく、狡猾で巧緻にたけていたのである。このことはイギリス側の文献も認めるところである。アポーによれば、東アングリア王国に標的を定めたとき、イーヴァルは実に周到に戦略を立てる。エドモンド王が敏腕の武将である情報を得ると、エドモンド王の周辺の人々をことごとく殺して、王国軍が王の支援ができないようにしようと目論んだ。当時、エドモンド王はヘイエリズドンという地区に滞在していたが、その住民を撲滅すれば、戦闘要員もなくエドモンド王は絶体絶命の窮地に陥ることになる。また、イーヴァルは戦艦を離れるときは、かならず頑強な護衛をつけた。いかにもデイン人の王らしく、危険を冒してまで正攻法の戦略をとるようなことはなかったのである。つまり、敵方は孤立状態にし、自らは安全確保に努めたのである。

(3)

エドモンド王を殺害して東アングリア王国を崩壊させると、残るはウェセックス王国のみである。しかし、イーヴァルは後事をハールヴダンに託して、彼自身は北方へ引き返した。この動向については、ウェセックス王国の首脳部、とりわけ、当時まだ若輩の副将ではあったが知力あるアルフレッドは、かなり正確な情報を得ていたのではなかろうか。それは、アルフレッドの戦略に反映されている。

イーヴァルが離れたデイン人の軍団は、紀元870年、新たにハールヴダンが率いてウェセックス王国をめざした。この年は、先に述べたように、戦闘に明け暮れた年であった。中でも、アッシュダウンの戦いは、兄王エゼルレッドを差し置いて、副将アルフレッドが一躍勇名を轟かせた事件であった。この戦いにおけるアルフレッドの行為については、すでに ‘Alfred the *Really* Great’ その他において詳しく論じたが、アルフレッドに対する非難も避けられなかった。

アッサーはアルフレッド王を自らの主君として敬愛していた。従って、あからさまにアルフレッド王を非難してはいない。しかし、『アルフレッド大王伝』において、アッシュダウンの戦いにおける副将アルフレッドの行為を暗に叱責しているように思われる。兄王の指揮下にあるという序列を無視し、神への奉仕をないがしろにしているからである。これが、アルフレッド王とは直接的な関わりのない12世紀の歴史家マームスベリーのウィリアムは、舌鋒するどく非難し、「若気のいたりで余りにも不信心」と切り捨てている。アッサーとマームスベリーのウィリアムそれぞれの立場からすれば、彼らの批判は的をはずしてはいない。

しかし、条約不履行など日常的なイーヴァルはじめデイン人の戦術、そして、それに破れた東アングリア王国の悲惨を念頭においてアッシュダウンの戦いを考えると、アルフレッドの対応の仕方もうなずけないこともない。まず、兄王に先駆けてウェセックス軍を進軍させたことは、イーヴァルほかデイン人の情報収集能力と巧みな戦術を知っていれば、むしろ現実

的と言えるかもしれない。ハールヴダン率いるデイン人の軍団は巧妙に早々に丘陵の高処を確保し、エゼルレッド王がミサに列する時間をねらっているからである。統率者を孤立させることは、彼らの作戦である。指揮系統を不能にさせようとしているのである。アルフレッド王は、こうしたデイン人の策謀をかなり知っていたのではないか。エドモンド王が「資力と幸運がなかった」ために武力を捨て信仰を前面に押し立て敵軍に向かい、結局は国王の死と王国の崩壊をもたらしたことを考えると、もし、程度の資力があり、知力で幸運を引き寄せることができれば、国王を救い、王国を防衛することができるであろう。アッシュダウンの戦いでアルフレッドがとった行為は、ほとんどエドモンド王と逆である。しかし、彼の「軽率な行為」は、誹謗されながらも、また、かならずしも直接的に功を奏さなかったとしても、最終的にはウェセックス王国を勝利に導いたことは確かである。

(4)

アッシュダウンの戦いで、ウェセックス軍は勝利をおさめた。しかし、この激戦で王国も兵士も疲弊していたと思われる。エゼルレッド王は、アッシュダウンの戦いで負傷したためか、その後続いたベイズィングの戦いの敗戦のあとで他界している。従って、アルフレッドがウェセックス国王に即位し、自らの指揮のもとにウィルトンの戦いに望むのである。しかし、長時間におよんだこの戦いは、最終的にデイン人が勝利をおさめた。すでに、9回の大規模な戦闘と無数の小競合が続き、ウェセックス軍は弱体化の一途をたどっていた。

おそらく、ウィルトンの戦いにはアルフレッド王の宿敵となるグスルムが参加していたことであろう。グスルムは紀元871年の「夏の大軍団」を率いて到来し、ウィルトンの戦いでハールヴダンの軍団に合流したと思われる。一旦、ロンドンにもどったあと、ハールヴダンとともにマーシャ王国とノーサムブリア王国を席卷し、レプトンで軍団を二分割して、ハールヴダンはノーサムブリアへ北上し、グスルムはウェセックス王国の制覇を

目指すのである。

ウィルトンの戦いの後、紀元878年までは、アルフレッド王にとっては、いわば作戦と逃亡の時代である。ここでも、エドモンド王とは正反対の姿勢が見られる。アルフレッド王は敵方の動向をうかがいながら戦略を練っていたが、エドモンド王は敵前に我が身をさらし潔く投降したのである。この間、グスルムは、ときにはアルフレッド王の追撃をかわしながらも、ウェセックス王国を縦横に駆けめぐっている。デイン人の統領らしく精力的に詳細に情報収集を試みているのである。そして、紀元878年の十二夜すぎ、ウェセックス王国の王領地チップナムにいたアルフレッド王を襲う。しかし、アルフレッド王は自ら投降することはしない。サマセットのアスルニー島に逃亡し、その地で密かに隠遁生活を送るのである。といっても、「パンをこがしたアルフレッド王の話」など、数々の逸話が物語るように、アルフレッド王はいわばゲリラを放って敵方の情報を収集し、反撃の機会を待っていたのである。

この年のエディントンの戦いは、イギリスの歴史の命運を決めた事件であった。この戦争については、「エディントンの戦い [I] [II]」において詳しく論じたが、戦闘の結果を略述すれば、こうである。アルフレッド王は長時間にわたるエディントンでの激戦の末に敵の軍勢を打ち破り、さらに彼らをチップナムまで追撃して城塞に閉じ込め、14日間の兵糧攻めの結果、最終的な勝利をおさめた。アルフレッド王は、人質を渡すこと、王国から退去すること、キリスト教徒に改宗すること、などを即座に取り決めた。アッサーはグスルムの受洗の模様を印象的に描いている。

……3週間後、異教徒らの王グスルムは30人の家来をともなって、アスルニーの近くのアラーと呼ばれるところまで、アルフレッド王に謁見にきたのである。アルフレッド王は彼らに洗礼名を与え、聖なる洗礼盤から彼らを抱き上げた。8日目に、聖香油帯を解く儀式がウェドモアと呼ばれる王領地で行われた。受洗が行われたあと12日間、彼は王のもとに滞在していた。アルフレッド王は、グスルムと彼の全て

の家来に、膨大な豪華な財宝を惜しみなく与えた。

ウェドモアで締結された条約によって、グスルムはかつてエドモンド王の国であった東アングリアを統治することになった。アルフレッド王はイングランド全域を掌中におさめたわけではなかったが、ウェセックス王国はその版図をさらに広げた。ここで着目すべきは、アルフレッド王がグスルムをキリスト教徒に改宗させていることである。しかし、エドモンド王は、戦いに勝ち目のないことを悟るや、司教の勧める逃亡を拒絶し、「キリスト教の信仰の鎧を」まとして「キリストのもとでのみ生き統治する」という毅然たる態度を示す。イーヴァルの使者に、異教徒への服従は断固として拒否する旨を伝えることを命じて帰す。その伝言を、エドモンド王はこう結んでいる。

「……ゆえに、こう思い知れ。キリスト教の王エドモンドは、この世の命惜しさに異教徒の支配者に従うつもりはない。そなたが我らの信仰に改宗するなら別だがな。この王は、むしろ永遠の王の陣営の旗手になりたいと思うのだ。」

一方、アルフレッド王は、エドモンド王が最初に放棄した行為を実行に移した。戦いに従事するや、まず、武力を信仰に優先させたのである。情報の収集と作戦の構築、このことが最初であった。しかし、最後には、異教徒の敵方を改宗させることに成功したのである。このように考えると、アッシュダウンの戦いにおいては、ミサに没頭する兄王エゼルレッドの信仰心を無視した理由が見えてくるであろう。また、副将のアルフレッドが王位にある兄王を無視したことも理解できそうである。

おわりに

これまで論じてきたように、9世紀の後半、東アングリア王国のエドモンド王とウェセックス王国のアルフレッド王が、襲来するデイン人に対し

てまったく対称的な行為に出たことがわかる。簡潔に言えば、エドモンド王は信仰を盾にして戦い、キリスト教国を失った。アルフレッド王は武力を盾にして、キリスト教国を護った。たしかに、スミスが言うように、エドモンド王には「資力と幸運がなかった」かもしれない。しかし、アルフレッド王にしても、とくに、ウィルトンの戦い以降は国力も戦力も低下していた。エディントンの戦いを迎える直前まで、アルフレッド王はアスルニーという辺鄙な沼沢地帯の片隅に身を隠していたのである。また、イーヴァルとグスルムの資質は異なるかもしれないが、その勢いにおいては、必ずしも大きな差異があったとは思えない。むしろ、幸運を呼び寄せたかどうかが問題であろう。ただ、いずれも間違いなく異教徒に対するキリスト教徒の戦いであった。

まるで申し合わせたように対照的であるために、この両王の間には何か関連がありそうに思われてならない。D. ホワイトロックは、アルフレッド王が東アングリア王国とエドモンド王の敗戦の情報を得ていたことに関しては、かなり否定的である。しかし、当時の資料から、アルフレッド王が東アングリア王国に関心を寄せていたことは十分に推測できる。実際、東アングリアまで遠征もしているのである。同じキリスト教を仰ぐ者として、アルフレッド王にはエドモンド王の行為が念頭にあったことは否定できないであろう。

エドモンド王がサクソニーから渡来したという伝説は、アボアの叙述に起因していると言えるであろう。『聖エドモンドの受難』の中で、エドモンド少年は「古サクソン人の高貴な家系の出身である (ex Antiquorum Saxonum nobili prosapia oriundus)」と書かれているからである。その後12世紀に、セツフォードの修道院のフォーンズのガルフリドス書いた『聖エドモンドの幼年時代』で、人口に膾炙した渡来の物語が成立する。東アングリア王国のオッフア王は世継のないことを嘆き、エルサレムに巡礼に行く途中、サクソニーの宮廷でエドモンド少年と出会う。オッフア王は、エドモンド少年を是非とも世継にとサクソニーの王アルクムンドに約束させ、聖地を目指した。彼は旅の途中で客死したが、約束は守られ

て、エドモンド少年はノーフォークのハンスタントンに上陸した、というのである。しかし、歴史的には、エドモンド王はケント王国の出身であるという。ハーヴェイ卿は、その事実を冷静に解き明かしている。つまり、エドモンド王はサリーのノーベリーの出身。父親はケント王とも称される太守のエアルヘレで、彼はウェセックス国王エグベルトの娘エアディスと結婚した。エグベルト王はアルフレッド王の祖父である。エアディスはアゼルスタンの妹である。アゼルスタンはアルフレッドの父王エゼルウルフの異母弟とも言われている。もし、そうであれば、エドモンド王とアルフレッド王は同じ祖父をもつ従兄弟同士となる。この家系図が正しいとすれば、アルフレッド王が東アングリアに熱い思いを致したとしても不思議ではない。

アルフレッド王は、エドモンド王の悲劇から多くを学びとったと考えることができそうである。二人とも、キリスト教を信仰することにかけては、同じように篤く敬虔な「キリスト教徒の国王」であった。「悪の手によって流された、祝福されし国王にして殉教者エドモンドの血は、(アルフレッド王によって)復讐されたのである。」

付記

() 内の補足はすべて筆者による。

引用・言及文献

Abbo de Fleury, *Passio Sancti Eadmundi*, Early Hymns, ed. F. Hervey, *Corolla Sancti Eadmundi*, London, 1907.

Æthelweard, *Chronicon Æthelwardi*, ed. A Campbell, *The Chronicle of Æthelweard*, London, 1962.

Asser, *Vita Ælfredi Magni*, ed., William Stevenson, *Asser's Life of King Alfred the Great*, Oxford, 1902. (小田卓爾訳『アッサーのアルフレッド大王伝』中公文庫, 1995)

Earle, J. and Plummer, C., ed., *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, 2 vols., Oxford, 1892-9.

Galfridus de Fontibus, *Liber de Infantia Sancti Eadmundi*, ed. T. Arnold, *Memorials of St. Edmund's Abbey*, London, 1890.

Hervey, F., ed., *The History of King Edmund the Martyr*, London, 1929.

- Roger of Wendover, ed., H.O. Coxe, *Rogeri de Wendover Chronica sive Flores Historiarum*, English Historical Society, 1841.
- Smyth, A. P., *Scandinavian Kings in the British Isles 850-880*, Oxford, 1977. *King Alfred the Great*, Oxford, 1995.
- Oda, T., 'Alfred the Really Great,'—What Happened at the Battle of Ashdown— *Geibun-Kenkyu*, vol. 73.
- Whitelock, D., *From Bede to Alfred*, London, 1964.
- William of Malmesbury, *De gestis Anglorum*, ed. T. D. Hardy, *Willelmi Malmesberiensis Monachi gesta Regum atque Historia Novella*, 2 vols., London, 1840.
- 小田卓爾「エデントンの戦い [I] [II]」（『言語文化研究所紀要』第24号（1992），25号（1993）および，「アルフレッド王と二つの戦役 [I] [II]」（『英語青年』Vol. CXL, Nos. 7, 8）